

座長 高橋壮一郎

4. アスピリン負荷後の MDA 生成による  
血小板寿命の測定

安中 裕子・佐藤 てい (新潟南病院) 検査科  
相馬 陽子  
渡部 透・伊藤 粋子 (同 内科)  
布施 一郎 (新潟大学) 第一内科

5. 脳血栓のアスピリン療法

大西 洋司・鈴木 昭治 (新潟市民病院) 神経内科  
星 允

6. 血小板増多をみとめた癌 2 症例

佐藤 正之・高橋 滋 (県立ガンセンター) 新潟病院内科  
村川 英三

血小板増多を呈した癌症例 2 例を報告し、当院における二次性血小板増多症の臨床的検討も行った。

症例 1：62才男。57.8.12 初診。肺癌（扁平上皮癌）  
WBC 21,100, Hb 12.4g/dl, pl 71.7×10<sup>4</sup>, NCC 8.1×10<sup>4</sup>/cmm, Meg 94/cmm, NAP 正常, CRP (-), 凝血学的異常なし。PRP 37×10<sup>4</sup> で自然凝集を認め各種凝集惹起物質でも血小板凝集亢進を認めた。化学療法で腫瘍縮少とともに pl 30×10<sup>4</sup> と減少、腫瘍増大につれ pl 80×10<sup>4</sup> と増加。

症例 2：81才男。57.10.12 初診。膀胱腫瘍・肺性心。  
WBC 14,700, Hb 13.2g/dl, pl 128.4×10<sup>4</sup>, NCC 2.8×10<sup>4</sup>/cmm, Meg 94/cmm, NAP 正常, aPTT-PT 軽度延長。PRP 44×10<sup>4</sup> で自然凝集はないが各種凝集惹起物質で血小板凝集亢進を認めた。症状軽快につれ pl 60×10<sup>4</sup> 前後となる。最近10ヶ月間で当院で pl 70×10<sup>4</sup> 以上の症例は52症例（検体頻度0.37%）で造血管腫瘍を除いた39例中悪性腫瘍23例、良性疾患9例、不明7例であるが疾患特異性はみられない。腫瘍に伴う血小板増多例では血清あるいは腫瘍中のトロンボポエチンあるいは CFU-Meg の測定が容易となることが望まれる。

7. 人工弁置換患者の血小板の形態及び機能に関する研究

花野 政晴・服部 晃  
滝沢慎一郎・布施 一郎 (新潟大学) 第一内科  
大滝 英二・小島 研司  
長山 礼三・高橋 芳右  
和泉 徹・柴田 昭  
坂下 勲・林 純一 (同 第二外科)  
江口 昭治  
小島 知子 (新潟鉄道病院) 内科

帰朝講演

司会 服部 晃  
Platelet type von Willebrand's disease  
新潟大学第一内科  
高橋 芳右 先生

特別講演

司会 柴田 昭  
生理的線維素溶解とその先天異常  
自治医科大学止血血栓教授  
青木 延雄 先生

第 6 回新潟血栓止血研究会

日時 昭和58年6月4日  
場所 ホテル新潟  
幹事 渡部 透

一般演題

座長 品田 章二

1. 脳血栓の血小板機能と抗血小板薬

チクロピジン

高橋壮一郎・荒井 奥弘 (長岡赤十字病院) 内科  
宮村 祥二・鴨井 健介  
黒川 和泉・鈴木 健介  
鈴木 正博・川瀬 康裕 (同 神経内科)  
外山 孚 (同 脳外科)  
宮路 久子・片桐 智美 (同 検査部)

2. ワーファリンは脳梗塞を予防できるか  
(150例の経験から)

本間 義章 (佐渡総合病院) 神経内科

目的：虚血性脳疾患に対する抗凝固療法につき、その年間再発症率と副作用の点から評価した。

対象と方法：急性期を過ぎた虚血性脳疾患のうち再発の危険の高い 150 例（平均66歳）にワーファリンを投与した。抗凝固能はトロンボテスト値で10～25%を目標とした。

結果：80例（53%）は平均34.5カ月間順調に経過したが、他の70例はトラブルにあつか投薬を中止した。全体の平均投薬期間は2年3カ月であり、コントロールの悪い2例に完成型脳梗塞の再発をみた。TIA 2例, RIND 1例の再発を加えても年間再発症率は1.5%にすぎなかつ